

麓軒主人漢詩集二

序

麓軒住田君笛雄は橋學に余が六年後輩
なり。甚だ夙慧。學に在りて已に公認會計
士補たり。致仕後湯島聖堂斯文會に作
詩を石川忠久先生後れて余が教室に受講し
廿載に垂とす。茲に今年齡八秩を迎へ
麓軒主人漢詩集二を板行せんと欲し序を
余に依頼す。余君と生平頗る親昵故に

桑雲軒製

菲才を省りみず欣然として之に應ず。君が
詩平明にして悠揚春風船蕩の趣有り其の
生の如し。而して君上戸なれば飲酒の詩多く
醉へば陶然として詩歌を吟唱す。鬚鬚を蓄
へ正に酒中の仙たるか。君が後記に曰く期頤を
計らんと。依って益作詩の訣を學ばれんことを願ひ
蘇詩一首を添へ上本を賀す。

平成戊戌盛夏日識此於武州同慶堂 貫道窪寺啓



從事孜々幾十年
懸車求雅老心圓
愉詩愛酒如忘齒
更願期頤佳什篇

賀院軒主人漢詩集二刊行實道



桑雲軒製

○橋費＝一橋大學

○髭鬚＝くちひげとあごひげ

○期頤＝百歳のこと

從事孜々 幾十年

懸車雅を求めて 老心円まかなり

詩を愉しみ酒を愛し齒はなを忘るる如し

更に期頤を願う 佳什の篇

○懸車＝年老いて官職を退くこと。漢の薛広徳が年老いて退官

した際、天子から安車（老人用の車）を賜り、それを高い所に

懸けつるして子孫にその光榮を伝えた故事から。

目次

新年

癸巳新禧	1
長汀初日	2
元朝試筆甲午新禧	3
乙未新禧	4
丙申新禧	5
丁酉新禧	6
戊戌新禧 其一	7
戊戌新禧 其二	8
春		
聖堂散策	9
西山莊賞梅花	10
早曉鶯聲	11
桃林隴月	12
東觀觀櫻	13
春日野遊	14
陽春野色	15

夏

墨江春色	16
堤上飛花	17
村里薔薇	18
山村新綠	19
春山行樂	20
窗外看雲	21
夏		
聖堂新燕	22
江島園游	23
訪友山莊 其一	24
訪友山莊 其二	25
茅軒歸燕	26
綠陰對酌	27
石泉煎茗	28
水村初夏	29
湖上愴涼	30
池畔過日	31
池畔放舟	32
海灣春景	33

清宵江月 35
旅窗曉月 34

秋

茗溪涼月 36
百花園藝發會 37
小田原清閑亭賞月 38
遊涉成園 39
古寺嘗茶 40
東窗待月 41
扶峰夕照 42
曉天纖月 43
秋月清涼 44
月前風竹 45
秋花耐霜 46
江上晚鐘 47

冬

茅軒夜雨 48
茅廬夜雨 49

旅窗夜雨 50
四壁寒燈 51
歲市除夕 52
歲晚歸鄉 53
爐頭守歲 54

羈旅

遊夢科高原 55
早曉露泉 56
遊田澤溫泉 其一 57
遊田澤溫泉 其二 58
三島吟行 59
伊豫木蠟館有感 60
訪多久聖廟 61
樹上黃鸝懷古曾游 62
訪得杜甫草堂書懷 63
九寨溝珍珠灘瀑布 64
黃龍旅思 65
異國中秋 66
67

湖畔古鐘樓

.....

68

人事

題吉澤鐵之先生自作展

.....

69

遠游留別

.....

70

津頭送友

.....

71

別來思友

.....

72

東日本大震災

.....

73

塔上望洋

.....

74

訪嘉美心酒造得美醪冬月

.....

75

美酒滿杯

.....

76

樂百藥長

.....

77

賞藤壺舞

.....

78

金婚有感

.....

79

八秩偶成

.....

80

春光花笑鳥來呼
冬夜寒風凜
乎時節變移千古事
青天白日每存吾

戊戌年頭所感

鏡軒書

新年

癸巳新禧

癸巳新禧

○癸巳きみ||みずのとみ
平成十五年

以德爲政國運新

徳を以て政を爲し

国運新たなれ

○以德爲政||論語爲政を牽ひく

待望堯日老閑人

堯日を待望する老閑人

○堯||伝説上の天子、
人徳高く善政を施す

南山比壽重佳歳

南山に寿を比し佳歳を重ね

○南山比壽||詩經比寿を牽ひく

愛酒愛吟怡賀春

酒を愛し吟を愛し賀春を怡ぶ

論語の爲政第十二の冒頭は「政を爲すは

徳を以てすれば、譬たとえば北辰其の所に居て

而して衆星の之これに共ともうが如し」とある。

近頃、政治の乱れを感じる事多く、政治家には

この章を良く身に帯して欲しいと願うや切である。

政まつりごと 徳もつて爲なさば

堯天の日は来たるらん

その下で寿長らえ

吟と酒 愛あいでて過あさん

長汀初日

長汀初日

刀水滔滔入海流

刀水滔滔 海に入つて流る

○刀水 利根川

東天五彩瑞雲浮

東天に五彩の瑞雲浮ぶ

太平洋上初光燦

太平洋上 初光燦たり

癸巳祥氛萬里周

癸巳の祥氛 万里に周し

これも平成二五年元旦の作である。

大伏岬に立つて東の方太平洋を望めば、

心ひろびろと平安を祈る気持になる。

大伏の岬に立てば

瑞雲の彩^{いろ}うるわしく

洋上は初日^{はつひ}きらめく

今年も良き年にならん

元朝試筆甲午新禧

元朝試筆(甲午新禧)

○甲午 きのえうま

平成二六年

展紙揮毫墨海香

紙を展べ 毫を揮えば墨海香る

選題正氣好詩章

選題は 正氣の好詩章

○正氣好詩章 〓

文天祥の「正氣の歌」を

丹心烈烈傳千歲

丹心烈々 千歳に伝ふ

言ふ

平穩年頭所感長

平穩なる年頭に感ずる所長し

状況宰相と称された南宋を代表する存在であった

文天祥(一二三六〜一二八二)は攻め寄せる元に徹底抗戦し、

捕えられた大都(北京)の土牢で帰順を推んで「正氣の歌」を

著し、刑死した。(藤田東湖の「正氣の歌」はこれに触発された。)

この年、一年を掛けてこの序と詩を書き上げた。

墨すれば香のほりて

筆ふるい 良き詩しるさん

真心の今も胸よつ

今の世の平和 有難し

乙未新禧

乙未新禧

○乙未いひつきのとひつて
平成二十七年

登山望海拜朝曦

丘に登り海を望み 朝曦を拜す

綺席相差椒酒卮

綺席相差(すす)む 椒酒の卮 ○綺席いひつきれいに飾った座敷

壽比南山天惠渥

寿は南山に比し天恵渥し

従心加八賀新禧

従心八を加えて新禧を賀す
○従心いひつ論語爲政篇を牽く。
七十歳

論語爲政篇「に吾十有五にして学に志す…」

七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」と

あるによる。志学(十五)、而立(三十)、不惑(四十)、知命(五十)、

耳順(六十)は全てこの章の表現が用いられるが、七十のみは

杜甫の「曲江」にもとづく、古稀の方が有名になっている。

高みより初日を拝し

家中で屠蘇を味わう

天は壽すいひつ長きを

七十八 新年祝う

丙申新禧

丙申新禧

○丙申いひつかのえさる
平成二八年

元朝参賀集良民

元朝参賀に 良民集う

天霽風和上苑新

天霽れ風和らぎ 上苑新たなり

萬歳喚呼澎湃起

万歳の喚呼 澎湃として起こる

至尊答禮自威神

至尊の答礼 自から威神

元旦の宮中参賀の景を叙した。

官城の参賀に列す

晴天春風めでたさに満つ

万歳の声わき上り

答礼の御稜威おこそか

丁酉新禧

丁酉新禧

○丁酉しやうかのとり
平成二九年

告曉晨鷄好韻長

曉を告ぐ晨鷄 好韻長し

東天淑氣示禎祥

東天の淑氣 禎祥を示す

家中共酌屠蘇酒

家中共に酌む 屠蘇の酒

八秩怡怡喜滿堂

八秩い怡々 喜び堂に満つ

○八秩い八十歳

この年辺りから、除夜の鐘つき、初日遙拜、初詣など
億劫になり、家で家族と屠蘇を祝う喜びを専らに
するようになった。

晨鷄あさどりの音高らかに

東天に目出たき氣あり

家中で屠蘇を染しむ

八十の翁の喜び。

戊戌新禧 其一

戊戌新禧 其の一

○戊戌ぼつしやうつちのえいぬ
平成三十年

全力恪勤心豁然

全力にて恪勤し 心豁然たり

○恪勤こくきん＝職務を忠実に
勤めること

然燈皓皓壽觴前

然灯皓々 寿觴の前

前年鐘送百餘八

前年鐘は送る 百余八

八秩無名意氣全

八秩名は無くとも 意氣全し

この年迄、会社勤務、公認会計士業務を全力で
頑張つて来て、心豁然、全く悔いは無い。除夜の鐘を
聞き乍らシャンパンを抜いて新年を迎える。
論語子罕第九に「四十五にして聞ゆるなきは、

これ亦畏るるに足らざるのみ」とある。八十を迎えても

名も無いが、それでも意氣盛んで過したい。(頂針

回還法(いわゆる「しりとり」)を試みた)

全力の勤め悔いなし

歳送る鐘をききつつ

新年を迎え杯あぐ

傘寿迎え 意氣尚盛ん

戊戌新禧 其二 戊戌新禧 其の二

大瀛波穩碧無窮 大瀛波穩やかに 碧 無窮

初旭將昇和氣充 初旭將に昇らんとして 和氣充ちたり

靉靄東天奇瑞霽 靉靄たる東天 瑞霽奇なり

巖頭拂袖太平風 巖頭袖を払う 太平の風

日立市十五町に「本宅」を残してあるが、そこから近くの
鵜の岬の巖頭に立って初旭を迎えた景である。
三島中洲が「磯浜望洋樓」を詠じた大洗は少し
南に当るが、その詩と同様に、氣宇壮大の気分
になる。

鵜の岬 海開けたり
初日の出 平和の氣に満つ
沖の迎の瑞霽奇しく
我が袖を吹く風爽けし

春

聖堂散策 聖堂散策

白松亭立傍梅花 白松亭立 梅花に傍う

拂面風吹情亦加 面を払う風吹いて 情も亦た加わる

滿苑迎春寒意減 滿苑春を迎えて 寒意減ず

停筵磴上醉韶華 筵を磴上に停めて 韶華に酔う

○韶華＝春の美しい景色

聖堂創立三百年を期は華金を仰ぎ、構内の立木の
整備が行われた。創立当初から存在した樹木を残し、後に
鳥が運んだ種子から育った樹を整備したのだが、そのお蔭
で、風通しが非常に良くなり、伏見宮殿下の手植えの
白梅も息を吹き返し、春らしさが感ぜられるように
なつた事は嬉しい限りである。

白松の榎樹亭立
傍らの白梅情あり
春迎え寒さやわらぐ
磴上に春景を楽しむ

西山莊賞梅花

西山莊にて梅花を賞す

○西山莊・瑞龍山＝常陸太田市にある水戸家ゆかりの地

瑞龍山下絶塵埃

瑞龍山下 塵埃絶つ

清素林園澗水隅

清素なる林園 澗水の隅

纂了史編歸臥處

史編を纂了し 帰臥せし処

○史編＝大日本史

義公深愛是斯梅

義公の深く愛せしは 是れ 斯の梅

○義公＝水戸光圀公

常陸太田市北部に水戸家代々の墓所の瑞竜山がある。

その南方約四キロの地に世捨人の佗住居のような西山莊がある。義公が大日本史を編纂し、天寿を全うした山莊である。春先、澗水に映る梅が美しい。

瑞竜山は清氣満ち

西山莊に澗水流る

義公晩年隠栖し

深く愛せし梅の花。

早曉鶯聲

早曉鶯声

早曙庭梅鶯囀時

早曙の庭梅に 鶯囀する時

清香好舌谷風吹

清香好舌 谷風吹く

何關料峭徘徊久

何ぞ関せん料峭 徘徊久し

○料峭＝風の寒いさま

春鳥春花不背期

春鳥春花 期に背かず

日立市に鮎川（アサギ）川が東流して太平洋に

そそいでいる。海岸から四キロ程上流の谷合に諏訪梅林

がある。早春、散策すると梅と谷風に乘つて聞こ

える鶯の音が染める。

朝まだき庭に鶯声（うぐいす）

梅の香を運ぶ谷風

春寒はものともせずは

春を呼ぶ花鳥楽しむ。

桃林朧月

桃林の朧月

桃園妍艷綵雲流

桃園妍艷 綵雲流る

朧月照筵催宴游

朧月筵を照らし 宴游を催す

有酒有琴君合樂

酒有り琴有り 君合に樂しむべし

千金春夜共忘愁

千金の春夜 共に愁いを忘れん

春先、高校時代の友人と、安曇野に旅した折の印象である。小地谷に北斎記念館を訪れた事などを思い出す。

桃園の花 雲に似て

朧月 宴を催す

酒も長し 樂の音も長し

千金の春夜 樂しむ。

東叡觀櫻

東叡觀桜

櫻雪紛飛東叡山

桜雪紛飛す 東叡山

騷人絡繹出塵寰

騷人絡繹として 塵寰を出ず ○絡繹 往来が続く様

英雄睥睨高臺上

英雄 睥睨す 高台の上 ○英雄 西郷隆盛像

終日嚴然對醉顏

終日嚴然として 醉顏に對す

御存知の上野の山の花ざかりの折の風景である。

上野の山は花吹雪

人陸統と花見する

西郷どんは台の上

醉顏に顔をしかめていさるかな

春日野遊

春日野遊

櫻花花信出門之

櫻花の花信に門を出て之けは

東野風吹紅影奇

東野に風吹いて紅影奇なり

樹下坐筵能養老

樹下筵に坐し 能く老を養う

論詩謙酌日遲遲

詩を論じ謙酌し 日は遅々たり

平成二十九年、多久市ふるさと漢詩コンテストで、
第二席をいただいた。

川崎市北部の緑ヶ丘公園は、桜の名所として有名で、
如木会川崎支部の仲間と花見の宴を催した
折の景である。

花見時よと誘われて

野にやりや風に花の雲

筵を敷いてどっこいしよ

酒酌み詩論じ遅日樂しむ

陽春野色

陽春野色

閑遊信步度春風

閑遊歩に信せれば春風度る

遠望櫻雲烟氣籠

桜雲を遠望すれば 烟氣籠む

兒女摘花芳草野

兒女花を摘む 芳草の野

青旗誘我小橋東

青旗我を誘う 小橋の東

漢詩作法教室の題詠。転結を対句の工夫を
試みた。

春風におろおろ歩き

遠くの花は花の雲

子らは花摘む春の野辺

橋のたもとに酒の店あり

墨江春色

墨江春色

儼船賞景墨江濤

船を儼い景を賞す 墨江の濤

兩岸櫻開寛客心

兩岸の桜開いて客心を寛くす

誘我金龍山下店

我を誘う金龍山下の店

登樓淺酌試微吟

登樓 淺酌 微吟を試む

作法教室での題詠。

転・結句は、かつて待乳山での年越そばの会の折の

経験をとり込んだ。

墨江に舟をやどせし

兩岸は桜満開

金竜山ふもとの酒楼

一寸一杯ひとうなり

堤上飛花

堤上の飛花

暄風信步送飛花

暄風歩に信せて、飛花を送る ○暄風||春のあたたかい風

花點雲鬟入彩霞

花は雲鬟ウんかんに点じ彩霞に入る ○雲鬟||婦人のふさふさした

正是扶桑最佳景

正に是れ扶桑の最佳の景

相歎相賞思無邪

相い歎じ相い賞し思ひ邪無し

総武線市ヶ谷から飯田橋に到る外堀堤を

花見散策した折の景を詠んだ。

花より美人、の心である。

春風に花下を歩めば

花びらがまげを飾れり

日の本のこの佳き景色

相共に素直に喜ぶ

村里薔薇

村里の薔薇

歸來村路午風疎

歸來 村路 午風疎なり

依舊薔薇花色舒

旧に依つて薔薇 花色舒ぶ

馥郁芳香使人醉

馥郁たる芳香 人をして酔わしむ

何輪國色麗妍餘

何ぞ輪^まけん 国色に

麗妍余す

○国色 国一番の美人、
転じて牡丹を言ひ

作法教室での題詠。「歸來村路」を除いた景は、

神奈川県漢詩連盟の勉強会で良く行く横浜の

県立近代文学館へ行く途中に横切る「港の見える

丘公園」のバラ園の景である。

故郷の村の小路の午下り

変わらなきばらの花色

人酔わす香の良さよ

美しさはたんなどには負けはせぬ

山村新緑

山村の新緑

柳眼纒生正孟春

柳眼纒かに生じ、正に孟春

○柳眼 柳の新芽
○孟春 初春、陰曆の一月

隣鶏喔喔報清晨

隣鶏喔々 清晨を報す

徘徊十里東風路

徘徊十里 東風の路

野曠遙看淑氣新

野曠く 遙かに看る 淑気新たなるを

春迎え 柳は芽ぶく

すがすがし 鶏鳴く朝は

風は誘われ野は出れば

広野に満ちる淑気あり

春山行樂

春山行樂

習習春風拂我衣

習々たる春風 我が衣を払う

山禽恰恰弄晴暉

山禽恰恰 晴暉を弄す

○弄す＝めでる

路傍欲憩聞清響

路傍に憩わんと欲して 清響を聞く

一掬澄泉脱俗機

澄泉を一掬し 俗機を脱す

日立市鮎川沿いの諏訪梅林に遊んだ折の景である。

近くに諏訪湖に通じていると云われる「大久保の風穴」がある。

大久保は江戸後期の漢詩人、大窪詩仏の出身地。

春風は我が衣を払う

山禽も晴れを喜ぶ

路は傍う 流れの響き

一憩一掬 心洗わる

窗外看雲

窗外の雲を見る

林亭獨坐樂餘閒

林亭に独坐し 余間を楽しむ ○余間＝ひま、ゆとり

窗外雲流心自閑

窗外雲流れ 心自から閑たり

颯颯風吹松影冷

颯々風吹いて 松影冷ややかに

山中絶境隔塵寰

山中の絶境 塵寰を隔つ ○塵寰＝けがれた世、人間世界

作法教室の題詠であるが、日立市廿五町の小生の

「本宅」は、正にこの雰囲気そのものである。

本宅に帰った折も詩作が出来るよう、大漢和、

だれ漢、合英、精英など、詩書一式を備えて

ある。

亭に坐し ひまを楽しむ

窗外の雲の流れは閑かなり

松の枝 吹きゆく風は

此の山中仙境にこそ

夏

聖堂新燕

聖堂の新燕

楷樹亭亭聖院東

楷樹亭々 聖院の東

靈光透葉照花叢

靈光葉を透すかして
花叢を照らす

高鶯雙燕碧天下

高鶯の双燕 碧天下

飛去飛來齊景風

飛び去り飛び来たつて
景風を齊す

作法教室の題詠であるが、初夏の聖堂の
実景を詠んだ。

楷の木そびえる聖堂の庭
庭の花園に木もれ日ゆれる
聲をかすめて燕飛ぶ
青空に映ゆ 初夏の景

○景風 雨の風
四季の変化に
調和のある風

江島園遊

江ノ島園遊

渡橋攀笈入賓郵

橋を渡り笈を攀つて
賓郵は入る

樓上佳肴酒客游

樓上の佳肴 酒客の游

碧海青螺洋上島

碧海の青螺 洋上の島

禽飛魚躍闊然浮

禽飛び魚躍つて 闊然として浮ぶ

神奈川県漢詩連盟の吟行会の思い出である。
島内の詩碑をたずね歩いた。最も高い地
点にあるレストランで、ビールが
心地良く、鷹がピーヒョロロと鳴っていた。

江の島の崖の上なるレストラン
ビールにさざえでひとやすみ
沖の小島は貝に似て
禽飛び魚躍る夏の海

○青螺 青色の貝、初島が
このように見える

訪友山莊 其一 友の山莊を訪ぬ 其の一

幽人愛酒對青雲 幽人酒を愛し青雲に對す

壁上藏書雅好文 壁上の藏書 雅(もと)より文を好む

野鶴巢邊高綺樹 野鶴の巢辺 綺樹高し ○綺樹=美しく色づいた樹

風流瀟灑我從君 風流瀟灑 我は君に従わん

高橋時代生徒會長をつとめた小生をサボートして
くれた一級下の弁護士の先生が勝浦に別莊を所有して
おり、その当時の仲間数人で、お世話になった。

あわびを楽しみ、蕎麦を楽しみ、バーベキューで
楽しんだ。

酒を愛して暮らむ

本棚の書に興味を見る

鶴棲むなるや林の奥は

風流の心 我も欲す

訪友山莊 其二 友の山莊を訪ぬ 其の二

綠崖百合發離離 綠崖に百合發いて離々たり ○離々=鮮やか、

ひらひら揺れるさま

早曉風涼盛夏疑 早曉風涼しくして盛夏を疑う

爽氣伴來新雨過 爽氣伴い來たりて新雨過ぎ

野猿三四走繁枝 野猿三四 繁枝に走る ○繁枝=さかんに繁った枝

緑の崖に百合揺れて

夏にも似ざる涼しさよ

氣も爽やかは新雨すぎ

枝わたりゆく猿をみる

茅軒歸燕

茅軒帰燕

○茅軒||かやぶきの家

絲絲膏雨濕田園

糸々たる膏雨 田園を湿おす

○膏雨||草木をうるおす
良い雨

雙燕歸巢對語喧

双燕巢に帰り対語喧なり

○対語||対話

時節自知依舊轉

時節自から知る

○時節||四季の移り変り

旧に依つて転ずるを

今年又到草堂軒

今年又到来 草堂の軒に

○草堂||粗末な家

小学校時代丸六年間を、疎開した茨城県筑波郡

谷井田村上平柳で過した。その折暮らした農家での

思い出をペーパースに詠んだ。

間宮林蔵の生家が近くにあった。毎年二月の祥月に

専林寺の墓掃除をした。名字帯刀を許されていた

たが、死後は農の身分、一尺に満たない長丸の墓だった。

雨しととと田にそそぐ

声交しつゝ燕飛ぶ

めぐりて来るこの季節

今年も我家に帰り来る

綠陰對酌

緑陰対酌

兩人相酌綠篁深

兩人相酌む 緑篁の深きに

午日薰風醉抱琴

午日の薫風に酔いて琴を抱く

青眼清談涼氣爽

青眼清談 涼気爽やかなり

論詩謙會七賢心

詩を論じ謙会すれば七賢の心 ○謙会||酒盛りの会。

この詩は、多久市ふるさと漢詩コンテストで始めて

入選した詩である。始めて多久市を訪れ、湯

島聖堂とは又違った聖廟のたたずまいに、

感じ入った。

共に美酒酌む竹林の中

午のそよ風 ギター弾く

気もさわやかは眼を交し

詩を論じては七賢思う

石泉煎茗

石泉に茗を煎ず

泉聲清響忘心憂

泉声清く響き 心憂を忘る

品水煎茶樂雅遊

水を品し 茶を煎じて 雅遊を楽しむ

蟹眼翻波香愈遠

蟹眼波を翻して
香愈よ遠く

○蟹眼＝湯がわく時に生ずる
小さな蟹の眼ほどの泡

輕甌一啜亦風流

輕甌の一啜も亦た風流

○甌＝湯のみ

泉の流れ 心を洗う

水汲み茶を煮るみやびの遊

みづみづ湯は沸き香も上る

一碗喫し 風流楽し

水村初夏

水村の初夏

群鷗游泳弄晴光

群鷗游泳して 晴光を弄す

池畔逍遙晝尚涼

池畔逍遙すれば 昼尚お涼し

漾綠薰風村路靜

緑を漾わす薰風 村路靜かに

水澄氣爽是吾鄉

水澄み氣爽やかなり 是れ吾が郷

夏の光に禽も群れ

池のほとりは昼なお涼し

村の小路は風薫る

わがふるさとの爽やかさ

湖上愉涼

愉湖上涼を愉しむ

攀揖泛波蘆浦頭

楫を挙げ波に泛ぶ 蘆浦の頭

禽飛魚躍逸輕舟

禽飛び魚躍り 輕舟逸し

薰風習習涼千斛

薰風習々 涼千斛

○千斛 千回はかる程の量

碧水連天心自悠

碧水天に連なり 心自ら悠なり

作法教室の題詠であるが、高校時代に仲間数人と霞ヶ浦に泛んだ折の景を思い出して詩作した。筑波山が大きく見えた。

芦の浦よりとみずなどけな
禽飛び魚影に船足はやし
この涼しさはひとなるま
天に連なる水清し

池畔遲日

池畔遲日

樹林閑白晝

樹林 閑かなる白晝

池畔傍欄行

池畔 欄に傍いて行く

相共逍遙徑

相共に逍遙せし 徑

獨聽老鶯聲

独り聴く 老鶯の聲

会社に入社した最初の上司が、定年退職後に油絵を描かれ、プロの域に達せられた。夫人を亡くされて後に描かれた小品に讚の心算で作詩した。マツカーサー元帥が愛したサムエル・ウルマンの詩「青春」を教えて下さった朝礼が思い出される。氏もすでに鬼籍に入られた。

まひるの林 閑かなり
池のほとりをたどりゆく
亡き人と共に歩みしこの小徑
うぐいすを独りききつつしのおかな

池畔放舟

池畔に放舟

停揖清池杜若洲

楫を清池に停む 杜若の洲

○杜若Ⅱかきつばた

紫花耀耀映波浮

紫花耀々 波に映じて浮かぶ

○耀々Ⅱかがやくさま

夕陽西落月東上

夕陽西に落ち 月東に上る

難得佳時更何優

得難き佳時 更に何か優らん

あやめ咲く 池に舟とむ

紫の花 波に映じて

陽は西は月は東は

良き時を何にか比せん

海湾暮景

海湾の暮景

緑松青海濯塵機

緑松青海 塵機を濯う

○塵機Ⅱ汚れた機縁、俗念

一片浮雲舟影歸

一片の浮雲 舟影帰る

入牖潮風無限好

牖に入る潮風 無限に好し

高樓樂聖夕陽微

高樓聖を楽しめば

○聖Ⅱ清酒の別名

夕陽微なり

真鶴の岩海岸に「岩忠」と云う船宿がある。

魚が新鮮で絶品。近くの「眺望公園」に、石川忠久先生の

詩碑がある。神奈川県漢詩連盟の詩遊会が

泊まりがけの吟行会を実施した。その折の思い出

である。

松はみどりには青く

遠い沖から舟帰る

慈吹く風は涼しくて

ほろりと酔いて入り陽めづ

清宵江月

清宵江月

徹舟清夜月明時

舟を徹(やと)う 清夜月明の時

置酒雅筵絃曲奇

置酒雅筵 絃曲奇なり

江上吹顔風爽冷

江上顔を吹く 風 爽冷

金蟾影碎漾漣漪

金蟾の影碎けて 漣漪に漾う ○金蟾=月のこと

東京都漢詩連盟で浅草橋から東京湾周航の
吟行会を催した。その折の景である。一隻借り切り
で、カラオケも出て盛り上がった。

月見の舟を乗り出て

酒や歌声 みやびの宴

川面の風は涼やかに

水にくだける月影清し

旅窓暁月

旅窓暁月

落月窺窓山桂芬

落月窓を窺い 山桂芬たり

一聲啼血醉中聞

一声の啼血 酔中に聞く

南風吹夢歸心切

南風夢を吹き 帰心切なり

渭樹江雲遙想君

渭樹江雲 遙かに君を想う

天宝五(七四六)年 杜甫三十五才の作「春日憶李白」
(五言律詩)の後半に、

渭北春天樹 (自分が居るのは渭水の北)

江東日暮雲 (あなたが居るのは長江の東)

何時一樽酒

重東細論文

とあるによる。

○渭樹江雲=杜甫の詩「春日憶李白」
「遠くの友を思う情が切実なこと」

窓をりかがり西の月

酔中にきく ほととぎす

夢吹く風は郷しのび

遠くの友を想うかな

秋

茗溪涼月

茗溪涼月

○茗溪を去す||お茶の水辺の神田川

中秋迎月茗溪邊

中秋月を迎う 茗溪の辺

棹叩空明飛沫妍

棹は空明を叩いて飛沫妍なり ○空明||清水に映る月かけ

綠酒稱鶻涼氣好

綠酒 鶻を称げ 涼氣好し

篷窗醉唱謝莊篇

篷窓に酔唱す 謝莊しゃせうの篇

○篷窓||とまでおおつた舟の窓
○謝莊の篇||謝莊の表わした
「月の賦」のこゝ

「月の賦」は、陳王曹植が忠臣の死を悲しみ、夜月に彼らをしのんだ様を賦した名文で文選(賦篇)に収められている。

中秋の月は麗しお茶の水

月影われて飛沫飛ぶ

杯をあげれば涼氣満つ

謝莊の篇に合う景色

百花園聽養會

百花園にて養むすを聴く會

聽養看花植杖遊

養を聴き花を看 杖を植うてて遊ぶ

樓前燎火映池浮

樓前の燎火 池に映じて浮かぶ

中天半月誘詩境

中天の半月 詩境を誘う

騷客瓊筵樂酒留

騷客 瓊筵に酒を楽しみて留まる

東京都漢詩連盟の秋の吟行会の景である。

午後四時すぎに入園、園内の花を楽しみ、虫声を聞き

詩碑をめぐる賞した後、茶亭に登楼、柏梁体を巻き、

月をめめて美酒に酔い、楽しんだ

花好し虫好し百花園

かがり火池にかがやいて

半月誘う詩の心

樓上酒好し帰を忘る

小田原清閑亭賞月

小田原清閑亭にて月を賞す ○清閑亭＝黒田侯爵の別荘

だった亭、小田原城
三ノ丸跡に有り

溝堤露冷歩中秋 溝堤露冷やかにして中秋に歩す

月影團々映水浮 月影団々 水に映じて浮かぶ

天上清光三五夜 天上の清光 三五の夜

登樓吟會共良儔 登樓吟會 良儔と共にす ○良儔＝良き仲間

神奈川県漢詩連盟の詩遊会では毎年、清閑亭で

月見の宴を催している。一般市民も含め、五十人程が集う。

お城の堤 歩し行けば

月影まん丸 水に浮く

十五夜の月天はあり

友と吟する清閑亭

遊涉成園

涉成園に遊ぶ

○涉成園＝京都駅近くの名園

陶淵明「帰去来辞」より名付けられた

翠黛東山秋雨煙 翠黛の東山 秋雨煙る

芙蓉葉緑白花鮮 芙蓉葉は緑に 白花鮮やか

頼翁描出涉成景 頼翁描き出せし 涉成の景 ○頼翁＝頼山陽

石塔木橋池水邊 石塔木橋 池水の辺

近畿漢詩連盟主催の全日本漢詩大会の翌日の

吟行会の景である。園の名は陶淵明が園田の居に

帰り、くつろいで酒杯を傾げ、南窓に倚って「園は

日に涉つて以て趣を成し、門は設くと雖も常に関す」

から採られている

東山 雨にけかりて

池のはす 緑葉白花

頼翁の十三景の涉成園

石塔木橋 池に映ゆ

古寺嘗茶

古寺にて茶を嘗む

鎌臺古利盛秋天

鎌台の古利 盛秋の天

○鎌台＝鎌倉の美称

後苑幽堂起細煙

後苑の幽堂に 細煙起る

一椀喫茶喉吻潤

一椀 茶を喫すれば 喉吻潤い

更添瓶菊自陶然

更に瓶菊を添えて自から陶然

神奈川県漢詩連盟の詩遊会で、鎌倉の淨妙寺に

吟行し茶をいただいた。出された菓子が、本物の柿に

そっくりであった事が印象に残っている。

秋の鎌倉古寺を訪り

お堂に茶煙軽く上る

茶菓子で抹茶一すすり

床の間の菊も美しや

東窗待月

東窓に月を待つ

長路驅車到故郷

長路車を駆って故郷に到る

登樓依舊欲斜陽

登樓 旧に依り 斜陽ならんと欲す

東窗風爽桂香冷

東窓風爽やかに 桂香冷ややかなり

閑待銀盤天一方

閑に待つ 銀盤 天の一方

日立市十五町の「本宅」に帰った折の景、庭に良し

香を放つ金木犀があり、二階の東の窓からは太平洋の

水平線が見える。くつろいで月を待つ十分のせいなく。

郷に帰るは久し振り

二階の窓から夕陽見る

風は流れる金もくせい

満月上るを閑に待つ

扶峰夕照

芙蓉夕照

西風颯颯促吟筇

西風颯々 吟筇を促す

案句鳴盟清入胸

句を案ずる鷗盟 清 胸に入る

坐石林間樂瓶酒

石に坐し林間に瓶酒を楽しむ

遙望夕照染扶峰

遙望すれば夕照 扶峰を染む

東京都漢詩連盟で、埼玉県西部に吟行した折の景。
富士見台山中で、携帶炉で烟をつけ、夕陽に映える
富士山を遠望しつつ、仲間と楽しむ酒は最高だった。

秋風に特に杖曳き

友と詩作す

林間に酒あなためて

富士見つつ楽しみ極む

曉天織月

曉天織月

○織月 細い月・三日月

酒醒清寒透弊衣

酒醒めて清寒 弊衣に透る

曉天窗外遠山微

曉天の窗外 遠山微かなり

織織月落歸心切

織々たる月落ち 帰心切なり

客舎倚欄待曙暉

客舎欄に倚り 曙暉を待つ

酔つて寤覚めの曉けの空

遠山ほのかに良き姿

三日月落ちて寒気あり

もうすぐ旭日昇らん

秋月清涼

秋月清涼

浴後幽庭脱俗翳

浴後の幽庭 俗翳（俗）を脱す

○俗翳＝世俗のやかましき

玲瓏圓月獨吹簫

玲瓏たる円月に独り簫を吹く

我將乘鶴遊天外

我將に鶴に乗り天外に遊び

更作仙人王子喬

更に仙人王子喬（喬）に作らんとす

○王子喬＝周の靈光王の太子
嵩山で仙人となつた。

浴後の庭は仙人境

月を迎えて笛吹けば

鶴は乗りなる心地して

王子喬の遊を樂しむ

月前風竹

月前の風竹

中秋明月照篁叢

中秋の明月 篁叢を照らす

籊籊疎枝舞晚風

籊（てびき）々たる疎枝 晚風に舞う

○籊籊＝竹の細く長いさま

如此良宵詩可就

此の如き良宵 詩 就る可し

龍吟吹逐白頭翁

龍吟吹き逐う 白頭の翁

○龍吟＝笛のひびき

竹林月に照らされ

枝々は夜風にそよぐ

十五夜は詩も出来上がり

白頭も笛に酔うかな

秋花耐霜

秋花霜に耐う

蕭蕭幽徑夕陽斜

蕭々たる幽徑 夕陽斜めなり

習習冷風移物華

習々たる冷風 物華移る
○物華＝美しい景色

籬落猶看菊花色

籬落に猶お看る 菊花の色

耐霜清楚思無邪

霜に耐え清楚 思い邪無し

秋の小径の夕まぐれ

風習々と良き景色

まがきは菊花尚ほありて

霜に耐えたる白さかな

江上晚鐘

江上晚鐘

中流徐下水溶溶

中流徐ゆるぎに下れば 水溶々

舷側求涼秋氣鍾

舷側きわに涼を求むれば 秋氣鍾かねまる

天外塔頭雲影淡

天外の塔頭 雲影淡し
○天外塔＝スカイツリ！

乘風隱隱夕陽鐘

風に乗って隠々 夕陽の鐘

墨江に舟下りして

秋の夜の涼しさ楽しむ

かの塔は雪の彼方に

風伝う夕暮れの鐘

冬

茅軒夜雨

茅軒の夜雨

精讀經書歎不才

經書を精読し不才を歎く

暗燈揺焰薄寒催

暗灯焰を揺らし薄寒催す

傾杯凭几更深後

杯を傾け 几に凭り更深き後

軒廡有聲疏雨來

軒廡に声有り 疏雨来る

○軒廡＝軒とひさし

書は我が師 不才導く

ゆらく灯に夜寒迫りて

深更に杯かなむけたれば

軒の端に雨音来る

茅廬夜雨

茅廬の夜雨

燈前開卷夜沈沈

灯前巻を開けば 夜沈々

軒滴漫聽一曲琴

軒滴 漫に聴けば 一曲の琴

僻巷深居門半鎖

僻巷の深居 門半ば鎖す

傾杯獨慰寂寥心

杯を傾け 独り慰む 寂寥の心

灯をともし夜更けの読書

軒滴は琴の音の如

巷外れ佳びの住居は

独り酌み 心なぐさむ

旅窗夜雨

旅窓の夜雨

旅館深更雨爛斑

旅館の深更 雨爛斑

○爛斑＝あやのある様、ばらばら

燈前尚友忘人間

灯前 尚友 人間を忘る

○尚友＝昔の賢人を友とす、
古書を読む

遙思晋世脱塵網

遙かに思う 晋世

○晋＝東晋、317～420

塵網を脱せし

五柳先生似白鷗

五柳先生 白鷗に似たるを

○五柳先生＝陶淵明、
365?～427

○白鷗＝きじの一種、
尾と背が白い

旅の夜更けの雨の音

灯前書を読み古人識る

五柳先生塵網を脱す

白鷗に似る清らかさ

四壁寒燈

四壁寒灯

孤蛭招愁四壁寒

孤蛭 愁を招き 四壁寒し

朔風凜凜報更闌

朔風凜々 更の闌たけなわなるを報ず

閉書想睡重袍處

書を閉じ睡を想い 袍を重ねる処

明滅蕭條燈影殘

明滅 蕭條として燈影残す

秋の虫聞くカランドラ

風ひやうひやうと夜も更けて

暗き灯影は書を閉じる

寝るも難き夜寒かな

歳市除夕

歳の市除夕

商賈嗽誘我呼

商賈嗽々 我を誘いて呼ぶ

巡筵購酒又沽蔬

筵を巡らせて酒を購い 又た蔬を沽う

臘醇欲酌春風動

臘醇酌まんと欲すれば

○臘=十二月

春風動く

百八鐘聲告歲除

百八鐘声 歳除を告ぐ

神奈川県漢詩連盟の詩遊会では、毎年漢詩カレンダーを作る。各月一人ずつ分担するのだが、この詩は平成三十年の十二月を飾らせていただいたものである。

アメ横杖良き一巡り

酒買い肴買ひ人混みを行く

春の兆しを感じつつ

百八鐘声年の暮れ

歳晚歸郷

歳晚歸郷

久約歸郷會舊知

久約歸郷 旧知と会す

追懷竹馬少年時

追懷す 竹馬少年の時

古稀歳晚喜長壽

古稀の歳晚 長壽を喜ぶ

百八鐘聲春色隨

百八の鐘声 春色隨う

村の同窓会に出て

竹馬の頃を思い出す

共に喜ぶ古稀の健

年越しの鐘に乾杯す

爐頭守歳

炉辺頭守歳

弟兄姊妹坐圍爐

弟兄姊妹 坐して炉を囲む

温酒笑談懐古俱

酒を温め笑談し 懐古を俱にす

不覺須臾雷影白

覺えず須臾にして 窓影白むを

交歡賀頌有清娛

交歡の賀頌 清娛有り

父の三十三回忌と母の三回忌、小生の傘寿と弟の古稀を併せて、一族で集まった。父母を送ったが、兄弟姊妹七人、一人も欠けず、有難いことと思う。

兄弟姊妹久し振り

七人笑談酌み交す

いつの間はやら窓白む

声をそろえて「おめでとう」

羈旅

遊蓼科高原

蓼科高原に遊ぶ

鳥鳴花發似桃源

鳥鳴き花發き 桃源の似しこと

春遍蓼山詩趣存

春遍き蓼山 詩趣存す

七十七齡身尚健

七十七齡 身 尚お健なり

酣酣大醉又何言

酣々大酔 又た何をか言わん

蓼科高原に別荘を構える友人あり、

夫婦四組で春秋訪れる習慣になつてゐる。

この詩は喜壽を祝つた春の旅の景。

ちなみに、「この旅の会」「蓼山会」と称する。

夫婦仲良く、グルメ楽しくの意である。

鳥鳴き花咲く桃源郷

蓼科山に春満ちて

共に喜ぶ喜壽の健

大いに酌んで寿ことがん

早曉露泉

早曉の露泉

朝陽燦燦蓼科山

朝陽燦々 蓼科の山

鳥語關關深樹間

鳥語関々 深樹の間

欲浴露泉雲影泛

露泉に浴せんと欲すれば 雲影 泛ぶ

雲征無跡自安閑

雲征き跡無く 自から安閑

藝壇の会の旅の一景。某社のグループ会社用のテラスハウスに

宿泊すると早朝から露天の大温泉につかれて楽しい。

湯面に浮く雲の流れゆくのぞ、ゆったりと追えば、

鳥のさえずりも爽やかにこれ以上のさななくは、

無い。

朝日に輝く山の峯

鳥鳴く森の露天風呂

湯の面は浮ぶ雲追えば

雲さる後の青き空

遊田澤温泉 其一

田澤温泉は遊ぶ 其の一

蟬語鳥鳴青霽流

蟬語り鳥鳴き 青霽流る

山深水碧白雲浮

山深く水碧く 白雲浮かぶ

羊腸難路驅車後

羊腸の難路 車を駆りし後

沐浴清風解放憂

沐浴して清風に旅憂を解く

藝壇の会の旅の一景。

つつじの群落が美しい山であった。

山の麓に鳥鳴きて

谷の流れに雲白し

九十九折り越え橋は着き

沐浴みすませてくつろげり

遊田澤温泉 其二

田澤温泉に遊ぶ 其の二

愛吟愛酒曲肱眠

愛吟愛酒 肱を曲げて眠る

深夜醒來坐寂然

深夜 醒め来たつて坐(そぞろ)に寂然

七十餘秋空往去

七十餘秋 空しく往き去る

杜鵑一叫欲明天

杜鵑一叫 明けんと欲するの天

酔つてそのまま眠り込み
夜半に覚醒 身を起す
七十餘年 何為せし
明けの杜鵑に反省す

三島吟行

三島吟行

花蝶招人滿地香

花蝶人を招き 滿地香る

登臺風爽氣清涼

台に登れば風爽やかに 氣 清涼

樹陰圓坐樂吟詠

樹陰に円坐し 吟詠を楽しむ

天外芙蓉午日長

天外の芙蓉 午日長し

神奈川県漢詩連盟、詩遊会の吟行会で、
クレマチスの丘を訪れた折の作。井上靖文学館、
大岡信ことは館を訪れ、翌日は韭山反射炉見学、
茶摘み体験と楽しい旅であった。

花蝶の招き地に満ちて
高台の風さわやかに
樹陰は坐して詩を吟す
富士みそなわす日は長し

伊豫木蠟館有感

伊予の木蠟館に感有り

爲人碑實更無私

人の為に実を碎き 更に私無し

玉樹黃檀德自施

玉樹黃檀 徳自ら施す

化蠟爍身涙明世

蠟と化し身を爍き 涙して世を明らむ

仁心極意正存茲

仁心の極意 正に茲に存す

石川忠久先生のお悌を以て、伊予に

中野道遠の墓を訪ねた折に訪れた

木蠟館での感慨を謳った詩である。

私心なくして身を碎き

徳施す如き黄檀の木

身を爍き涙す人の為

仁心の極意蠟にあり

訪多久聖廟

多久聖廟を訪ぬ

嘉樹森森映夕陽

嘉樹森々 夕陽に映ず

仰高朱殿發輝光

仰げば高き朱殿 輝光を發す

丹邱聖廟前庭上

丹邱聖廟 前庭の上

十六詩碑錦字香

十六の詩碑錦字香し

○優秀者の詩碑十六あり

多久市主催のふるさと漢詩コンテストでは、第一席に

なると市の公園の一隅に、記念の詩碑を建てて下さる。

この詩を作ったのは、コンテスト開始十七年目の年で

あったので、前年迄の十六名の方々の詩碑が連なっていた。

メタセコイアの大樹は、美智子妃殿下(当時)お手植の由。

メタセコイアは陽に映えて

高き朱殿に光あり

聖廟前庭は整然と

十六の詩碑輝けり

樹上黃鸝懷古會游

樹上の黄鸝(會游を懐古す)

邇上秦淮遠訪尋 秦淮を邇上し遠く訪尋す

清真寺院綠江潯 清真寺院 綠江の潯

已無餘物昔時跡 已に余物 昔時の跡無し ○余物 残っている物

只聽黃鸝弄好音 只だ聴く 黄鸝の好音を弄するを

石川忠久先生と行く中国の旅で、秦淮河畔の道教寺院

清真寺を訪れた時の作。黄鸝の啼声を始めて聴く

ことが出来た。白帽をかぶった老僧が一人居て、机上の教典はうつつら埃をかぶっていた。

秦淮の水は緑に

清真寺河畔にあれど

往昔をしのぶ物無く

只だ庭の樹に黄鸝鳴く

訪成都武侯祠 成都の武侯祠を訪ぬ

君側今猶丞相眠 君側に今猶お 丞相眠る

堂前貳表懷當年 堂前の二表に当年を懐く ○二表 出師表前後二表のこと

森森廟社掩松柏 森々たる廟社 松柏掩う

願就遙尋感慨新 願い就って遙かに尋ぬれば 感慨新たなり

平成二八年四月、成都に旅をした折の作

祠前に杜甫「蜀相」の詩碑あり、日本語で

ではあるが、吟詠した事が感慨新た、であった。

丞相は君の側ら

出師表に往時を懐う

錦官城外柏森森

遠く訪ねて感慨深し

訪得杜甫草堂書懷

杜甫草堂を訪ね得て懷おもひを書す

詩聖草堂無世塵 詩聖の草堂 世塵無し

千年古跡集騷人 千年の古跡に騷人集う

錦官城下遠遊處 錦官城下 遠遊する処

蜀犬吠陽欣麗晨 蜀犬陽に吠ゆる 麗晨を欣ぶ

これも前の詩と同じ成都旅行の詩である。成都は盆地で、

曇天が普通、蜀犬は陽が出るといふかつて吠える、という。

小生嗜礼男で、一週間の間、全て好天続きであった。

草堂は塵外の里

人集い古跡をめぐる

錦官城を訪ぬれば

陽はうらら蜀犬は吠ゆ

九寨溝珍灘瀑布 九寨溝珍灘瀑布

號呼流下虎咆哮 号呼流下 虎咆哮

隱隱連條蔽白蛟 隱々たる連条 白蛟を蔽す

飛沫招虹鮮五彩 飛沫虹を招き 五彩鮮やか

宛如共喜藝林交 宛も共に

芸林の交わりを喜ぶ如し ○芸林＝文学者や芸術家の仲間

平成二九年成都の更に奥地、黄龍と九寨溝の

景勝地を訪れた。飛行場は四千メートルの高地。

散策に酸漿ポッケを携行した。

号々下る滝音虎の如

幅広の細滝 蛟うず連なる

虹にじかかり五彩鮮やか

芸林の交り共に喜ばん

黄龍旅思

黄龍旅思

仰望雪嶺白雲流

仰ぎ望む雪嶺に 白雲流る

龍瑞澄湖碧水幽

龍瑞の澄湖 碧水幽なり

栗鼠奔來禽鳥囀

栗鼠奔り来り 禽鳥囀ず

岷山山下探奇遊

岷山山下 奇を探りて遊ぶ

○岷山＝四川省・甘肅省に跨る
山脈
最高峰は五千米を越す

これも前詩と同じ旅での作。この半年位後の震災で、この地は

暫く觀光客はシャットアウトとなった。我々は訪れることが出来て

幸いであった。まぶたに浮ぶ光景は、日本の五色沼が

百箇もある程のスケールで圧倒された。

雪の高峰に白雲流る

龍すむ湖 水清し

リス來で鳥鳴く岷山の下

奇景喜び遊ぶかな

異國中秋

異國の中秋

逆旅庭前異國秋

逆旅の庭前 異國の秋

中天仰視獨閑遊

中天仰視し 独り閑遊す

今宵三五月如鏡

今宵 三五 月 鏡の如し

遙憶故園君見不

遙かに故園を憶う 君見るや不いなや

平成二十九年十月、ウィーンの景勝地ツェル・アム・ゼー

と云う処を訪れる機会があった。丁度旧曆九月十五日の

夜、異國のホテルの庭で中秋の名月を仰ぎ見ての作である。

異國に秋の旅の空

ホテルの庭に杖を曳く

十五夜の月まん丸と

故郷の君も見るならん

湖畔古鐘樓

湖畔の古鐘樓

雨霽旻天十月雲

雨霽れ 旻天に十月の雲

○旻天 秋の空

俯瞰碧水美漣紋

俯瞰す 碧水美漣の紋を

鐘樓閑送千年響

鐘樓 閑かに送る 千年の響

湖畔清望脱世氣

湖畔の清望 世氣を脱す

これも前作と同じ旅での作。欧州の古い街には大抵古い教会があり、その鐘の音は、異邦の異教徒の胸をも打つものがある。

雨晴れ青空十月の雲

見下す湖面細漣美なり

鐘送り来る千古の響

この清景に心洗わる

人事

題吉澤鐵之先生自作展

吉澤鐵之先生自作展に題す

金文甲骨自通玄

金文甲骨 自から玄に通ず

秀粹詞華紫氣妍

秀粹の詞華 紫氣妍なり

克繼克凌先考業

克く継ぎ克く凌ぐ 先考の業

龍驤鳳舞墨痕鮮

龍驤^{おと}り鳳舞い 墨痕鮮やかなり

詩、書、共に優れた先生の御作に接すると、いつも身の引きしまる思いがする。その自作展を拝観し、不才を顧みず作詩させていただいた。

遠遊留別

遠遊留別

○留別＝旅立つ人が書き
残して別れ去る

寒烟籠柳出游晨

寒烟柳を籠む 出游の晨

遠別關門客恨新

関門に遠別 客恨新たなり

千里辛酸何日盡

千里の辛酸 何れの日にか尽さん

故山此景夢中親

故山の此の景 夢中に親しまん

柳に籠める寒きもや

吾は旅立つこの朝

千里の道も越え行かん

故山の此景胸に秘め

津頭送友

津頭友を送る

蕭疎老柳列塘邊

蕭疎たる老柳 塘辺に列なる ○蕭疎＝木の葉などが落ちて

さびしくまばらなさま

一陣風來散晚烟

一陣の風来たつて 晚煙を散す

共酌新醪催惜別

共に酌む新醪 惜別を催す

明朝解纜意綿綿

明朝解纜 意綿々

土手の柳の葉は落ちて

風は夕もや吹き払う

別れの宴は新酒酌む

明日の舟出後いつ会える

別來思友

別れ来たりて友を思ふ

君留城裏百花園

君は留まる 城裏百花の園に

我向秋山橘柚村

我は向かう 秋山橘柚の村に

長旅孤羈千里路

長旅孤羈 千里の路

無由共賞此黄昏

此の黄昏を共に賞するに由無し

作法教室の題詠である。起承を対句に併立て、かつ起句も押韻する格とした。

君は留まるこのまちこ

我が行く先は秋の村

千里へたづまるこの旅路

黄昏賞し君想う

東日本大震災

東日本大震災

樓上漁船水上車

樓上に漁船 水上に車

全因海嘯振凶牙

全く海嘯の凶牙を振るうに因る

馳來隊士歩荒土

馳せ来る隊士は荒土を歩み

救援物財滞遠涯

救援の物財は遠涯に滞る

東日本大震災はまことに想像を絶する

大惨事であった。七律の前半をここに記録

として残すこととした。(後半は「小屋に残された

牛は鳴き声をあげ、家を失った人々は声も無し、

かつて桜の名所の地、その景の再来を切望す」と云う

趣旨)

船は樓上、車は海に

津波の狂牙恐ろしや

救援隊員礫土歩し

救援物資は近寄れず

塔上望洋

塔上望洋

高登層塔海濱傍

高く層塔に登る 海浜の傍ら

縹渺水光連彼蒼

縹渺たる水光 彼の蒼に連なる

去歲狂濤難想起

去歲の狂濤 想起すること難し

乘風上下鳥隨陽

風に乗り上下して 鳥 陽に隨う

日立市十五町は日本一人氣が高いと云々

鶉の岬国民宿舍があり、そこからの太平洋の

眺望は素晴らしい。東日本大震災の一年程後

ここを訪れた折の風景。

海辺の楼に登りてみれば

海ひろびろと天に連なる

去年の津波はあったのか

平和な風に鳥は舞う

訪嘉美心酒造得美醪冬月

嘉美心酒造を訪れ美醪「冬月」を得たり

斟聖更嘗蕎麴前

聖を斟み更に嘗む蕎麴の前

堪稱兩味似逢仙

稱するに堪えたり 兩味 仙に逢うが似し

方知絶妙工人技

方に知る 絶妙なる工人の技

嘉美心醇不惜錢

嘉美心の醇に錢を惜しまず

蕎喰り会の仲間のそば好きがそば前に好しとして

教えてくれたのが栃木の四季桜と、岡山の嘉美心であった。

岡山で国民文化祭の漢詩大会があった折、この詩を出し

た処、窪寺先生が「その酒蔵なら僕が案内する」と

おっしゃられ、驚いた。五代目社長藤井氏が東京農大で

勉強中の頃のお知合との事、人のつながりの奥深さ。

そば前に好し嘉美心

そばも引き立ち天上の美味

杜氏の力と低温の蔵

この酒錢を惜まず一斗二斗

美酒滿杯

美酒杯に満つ

美姫妖艶弄絃匏

美姫 妖艶 絃匏を弄す

○絃匏＝琴と瑟

醉客陶然嘗美肴

醉客陶然 美肴を嘗む

滿室花香佳宴夜

滿室花香る 佳宴の夜

重杯話舊忘形交

杯を重ね旧を話す忘形の交り ○忘形＝心からの交友

日野市で石川忠久先生の御指導を

仰ぐ花水吟社の総会が、八王子在の

「鶯啼亭」で催された。その折の景である。

美人かななる琴を聞き

酒良し肴良し皆陶然

興をそえるは床の花

忘形の交これからも

樂百藥長

百藥の長を楽しむ

晩春醞釀酌金觴

晩春の醞釀 金觴に酌み

初夏搾醪嘗碧香

初夏の搾醪 碧香を嘗める

秋醪到來齊爛醉

秋醪到来 爛醉を齎し

冬醇味得樂顛狂

冬醇味わい得て 顛狂を楽しむ

嘉美心酒蔵よりは春夏秋冬、四季夫々の美酒を

取り寄せて楽しんでゐる。一年間の楽しみを四句

全対格にまとめてみた。我が人生、百藥の長

を楽しむことが出来て幸福である。

春の新酒を金杯に酌み

初夏搾りたて碧香芳し

秋のうま酒酔を楽しむ

冬の無汚化酒狂い楽しむ

賞藤壺舞

藤壺の舞を賞す

絢爛衣裳芍薬名

絢爛たる衣裳 芍薬の名

燃犀臺上舞姫行

燃犀の台上 舞姫は行く

○燃犀 II はつきりしないものを
明白に

夢中世界光源氏

夢中の世界 光源氏

朗響幽玄月下笙

朗として響く 幽玄月下の笙

湯島聖堂の大成殿で毎秋日本舞踊の夜譚演がある。
この年は源氏物語の藤壺の巻が演ぜられ、正に幽玄
そのものの雰囲気であった。

芍薬の花の衣裳のりるわしく

かがり火映えて姫は舞う

光源氏の笛の音が

月下に響く夢の音

金婚有感

金婚に感有り

華燭婚成五十年

華燭婚成りて五十年

堪怡四子數孫縁

怡ぶに堪えたり 四子數孫の縁

今宵清宴皆稱賀

今宵の清宴 皆 賀を称う

吟得關雎天保篇

吟じ得たり関雎天保の篇

○関雎・天保 II 詩経の編名

昭和三十六(一九六二)年に結婚、二〇一一年に金婚式を
迎える事が出来た。三男一女に孫三人、皆健全に育ち
怡ばしい限りである。一族揃つての賀宴で声高らかに
詩経の詩を吟じた。

八秩偶成

八秩偶成

○八秩＝八十才のこと

居然八秩健而康

居然八秩 健にして康

○居然＝安らかなさま

愛酒高吟却老方

愛酒高吟は 老を却くるの方

日夕讀書詩亦就

日夕書を読み 詩も亦た就る

長生所望意軒昂

長生は望む所 意は軒昂

八十才を区切りとして上梓する二冊目の

詩集の棹尾として、この詩を置くことと

した。三冊目を目指して更に頑張りたい。

八十健康ありがたし

吟と酒とで若返る

読書詩作でボケ防ぐ

まだ頑張るぞ意気軒昂

あとがき

平成二十二年に、干支七句を期に、歳の数の七十二首を収めて最初の漢詩集を上梓してから八年が経った。この八年の間、作詩した漢詩は約三百首であるが、今般、八十歳となるのを記念して、その中から八十首を選んで、第二詩集を出すこととした。

「二松詩文」や「斯文」などに掲載されたものを中心にした。作法教室での題詠が多いのだが、極力自分の実際の経験を詠んだものを選んだ。それぞれの詩について、作詩の背景などを簡単にコメントし、記述してある。(詩として気に入って、選んだものの、実際の経験に基づいていない詩については、コメントを省いてある)

また、それぞれの詩について、趣旨を簡単な四行に纏めた訳詩を付けてある。コメントと合わせて読んで頂ければと思う。

今年から、聖堂で、松川玉堂先生について、書道のご指導を仰ぐこととした。その成果といたには少しく恥ずかしいのであるが、今年年頭の所感を半切に書き上げたものを、扉に掲げている。八十歳を回顧すれば晴れの日も雨の日もあったが、これからは吾が心は常に青天白日を保ちつつ進んで行きたい。八十の手習いであるが、意気をお汲み取り頂ければ

幸甚である。

六十四歳で漢詩の作詩を志して十六年になるが、この間一貫して温かいご指導をいただいた、石川忠久先生と窪寺啓先生に、深く感謝申し上げます。又、今回は窪寺先生より心あたたまる「序」と七絶一首をいただいた。御叱声を体し今後更に精進したい。

さて、我が今後の人生について、孔子先生の、従心に続けて、展望したところをご紹介して、更に充実した生を送りたいと思う。曰く、

八十にして、大いに我が信ずる處を語る(大語)

九十にして、有終を以て卒せんと欲す(有卒)

百歳、我が生全ったし 又何をか言わん(生全)

漢詩の作詩を志して十六年、道半ばにも達していない実情であるが、九十、百を目指して頑張りたい。日本における漢詩の世界の発展のためにも、微力を尽くして行きたい。

最後に、今回も又、(株)大和メディアクリエイティブの新河氏に大変お世話になった。感謝しつつ、お礼を申上げたい。

以上